

訂正
中等國文典
上卷

特72

187

301729-001-0

特72-187

訂正 中等國文典 上

三土 忠造 / 著

M34.5

DAC-0001



特72
187

明治三十四年二月十六日
文部省檢定濟

文學士芳賀矢一關
三土忠造著

訂正
中等國文典
卷上

東京
會社
富山房發兌



訂正につきて

本書出版以來幸に世の好評を博し、中小學百有餘校の教科書に採用せられて、版を重ねるに際し、既に幾たびにもなりぬ。其間大方の君子より數多有益の注意を與へられ、予が實驗上心付きし要點も少からざりしを、出版の急に迫まられ、毎版改正に著手するに暇なく、心ならずも舊版を踏襲したりき。茲に本年の夏期休業に際し、閑地に靜養せる間、始めて多少の訂正を加ふるを得たるは余が最も欣ぶ所なり。

訂正につきて
會社富山房發兌

80W04746

各章の下なる文例と練習題とは、最適切なるものを選び、著く其數を増加し、且多少の變換をなせり。又一般に互れる練習題若干を集めて、別の下巻の附録とせり。本文の假名は本版より片假名に改めたり。これ一見して文例と區別し易からしめんがためなり。

尙版を重ねるに隨ひて、益完成の域に近からしめんことを盟ふ。

明治三十二年冬

著者識す

中等國文典序

方今文法書の梓に上れるもの、牛に汗し、棟に充てり。然れども、教科用書として適當なるものに至りては、寥々たること、晨の星の如し。從來世に行はれたる、それかし氏の文典、くれかし氏の語學、其名は教科用書たりと雖、其實は文法に關する一家の研究なり。まゝ教科用のために作りたるものあれども、名たる大家は、教授の上の經驗なければ、實際の目的には、なほいたく隔りたり。

正中等國文典 一巻 二 會館 皇山房 藤原
さればこれ等の書を持ちて、生徒に臨むものは、力を勞すること、甚大にして、功を收むること、誠に少し。五年三年文法を學べる生徒の、こちたき名目を覺はたるのみにて、わか文章の誤謬をも正し得ぬは、教授者の罪のみならんや。さらぬだに無趣味がちなる文法の科をば、讀書作文こかけ離れて、いよく、無味乾燥に流れしむるは、方今教授上の一通弊にあらずや。

こゝに三土君が中等國文典は、この通弊を濟はんとて物せられたり。君は實際の教育家として、國語の教授を掌れる人なれば、平生の實驗をも

こゝして、この書は編まれつるなり。一わたり見たるこころにては、術語分類等の上に、獨創の見解を立てられたるふし、いこく、罕なり。教科用書として、ふかあるへき筈ぞかし。この書に擧げられたる例證の、卑近にして趣味に富める、上中下の卷々の、疎より密に進みて、いはゆる圓周教案といふ方法を採られたる、分解のみに終らずして總合にも注意せられたる、教科用書として、は大切なる用意に非ざるはなし。余はもこよりこの書を以て完璧なりとはいはじ。然れども一良教科書たりといふに憚からざるなり。

國語の文法には、術語の統一をはじめとして、未定なる問題尙頗多し。これらは皆將來の語學者が熱心なる研究を要すべきものなり。たゞし語學者の研究を採りて直に校堂にのぼすは、慎むべきことなり。今日の如く、文法教科書の皆無に近き時にあたりて、この良教科書を得たるは、かへすくも喜ばしき事にこそ。

明治三十一年四月三日

芳賀 矢一 識す

中等國文典

緒言

教科書を物せむとするものは、學術的記述書と教科書との別を明かにせざるべからず。學術的記述書は、記述すべき材料の性質によりて、其順序組織自から定まるべけれど、教科書は、生徒の讀化力によりて、其順序組織を工夫せざるべからず。一つは既に其知識を有する者に讀ましめ、一つはいまだ其知識を有せざる者に教ふるものなれば、其間に混すべからざる區別あるなり。然るに之を混ぜるが、今日の通弊なり。世に稱して教科書といふもの、中には、むしろ、學術的記述書に屬すべきもの、みぞ多かる。殊

に文法の如きは、いまだ不幸にして一部の教科書あるを見ざるなり。

徒にかこつも益なき業なり。いそや自から工夫せむと、内外の諸書を参考して、この頃一草案を起しぬ。これ唯高等師範學校附屬尋常中學校の生徒に教ふべき教案に供せむとの思立なりき。然るに、一人の工夫は偏固に陥る恐あり。之を公にして、廣く世の批評を求め、漸次に改良するところよけれ。且つは斯道のため、一層忠なる所以にあらずや、或人の勸むるまゝに、それも然りと思ひなりて、終に其言に従ひたり。されば思慮尙至らざるふしも妙からざるべし。世の識者幸に是正の勞を惜むなくんば、著者は斯道のために誠に喜ぶ所なり。己の幸は更にも言はず。

本書は閱者の懇篤熱心なる指導によりて、稿を變ふるこ
と數度に及び、大に面目を改めたり。又編纂の順序材料の
多少等につきては、畏友佐々木猪六、町田彌平の二氏より
有益なる忠言を與へられたること多し。著者は特に其由
を書して、永く好意を謝す。

明治三十一年三月十五日

小石川の寓居に於て

著者識す。

例言

一、文典といへば、音韻、單語、文章の三篇に分ち、始には總論として國語の性質、言語と思想との關係等を述べ、又單語篇の如きは、一品詞に屬する事共を、すべて一章の下に網羅するが、普通の組織なり。是、學術的記述としては尤適當なる書きざまならむ。但し固より教科書にはあらざるなり。教科書は專、生徒の類化力に順はざるべからざれば、言語と思想との關係、音韻などを始より事々しく載せむことかたし。一品詞に屬する事共を、一章の下に網羅せむことも亦望むべからず。例へば名詞には動詞より來れるあり、形容詞より來れるあり、是等は動

詞、形容詞を學びたる後ならでは解し難し。又動詞の活用、性等を一時に教ふるは、徒に生徒の心を混雜せしめて益なし。故に本書は卷を分ちて上中下三卷となし、上卷には極めて理解し易きもの、みを載せ、中卷にて之を補綴し、下卷に至りて、完結せしめたり。故に之を用ひむものは、必先、三卷を通讀せんことを要す。三卷は固より學年に配當したるにはあらず。唯材料の上より見て區別したるのみ。故に之を三ヶ年に教ふるも、四ヶ年に教ふるも、うは教師の方寸にあり。

一、在來の文典は、多く分解に密にして總合に粗なり。されど分解は寧、總合の方便なり。總合するための分解にあらずや。若分解のみにして止まむには、折角文法を修め

て、其効果は唯假名遣などを覺ゆるに過ぎざるべし。假名遣の如きは文法の枝葉のみ。文章を明瞭に解釋し、綿密なる思想を表出するには、益する所極めて少し。故に本書は總合を重くし、文章篇を委しくせり。

一、文法といふものを根本より考ふれば、今日の分類及び術語には如何はしきもの少からず。されど廣く之を使用せむ人の便を謀り、多くは舊に因りて變更せざる事とせり。

一、文法の例を古書に取るは、一般の習なり。之がために生徒は解釋に苦しむ、肝心の文法を理會せずして止むこと多し。本書は此弊を避けむと欲し、多く卑近の例を載せたり。されど生徒の熟知せる古文古歌は、却りて多く

之を採れり。是興味を添ふる一法なればなり。又同じ文例を屢用ひたるは、一文章の、文法上各種の方面より見らるゝことを知らしめ、且文例の説明に無益の時間を費さざらむことを欲してなり。

一、本書は文法を規則として暗記せしめず、歸納的に規則を發見し、演繹的に之を應用せしむる方法によらむことを欲し、規則の前には必、其例を擧げ、更に練習題を加へたり。但、何れも其一斑を示せるに過ぎず。教師は猶種々の適例を與へ、又讀書に作文に、常に之を應用して、一層深く練習せしめんことを要す。

訂正中等國文典 上卷

目次

第一章 名詞	一頁
第二章 代名詞	二頁
第三章 動詞	四頁
第四章 形容詞	二八頁
第五章 助動詞	三〇頁
第六章 副詞	三七頁
第七章 接續詞	四一頁
第八章 助詞	四二頁
第九章 感動詞	四四頁

第十章 單語の種類……………四六頁

正訂中等國文典上卷目次終

正訂中等國文典 上卷

文學士 芳賀矢一 閱

三 土忠造 著

第一章 名詞

○山川 牛馬 學校 義經 辨慶 白黒 夜
盤 上 下 勉強 等スベテ事物ノ名稱トシテ用ヒ
ラル、語ヲ名詞ト云フ。

一 二 三 十 百 千 一 日 十 年 等 數
チアラハセル語モ亦名詞トス。

次ノ諸文章中ニアル名詞ヲ指摘セヨ。

一、補正成は忠臣なり。

- 二、東京は日本の首府にして、人口頗多し。
- 三、馬は人を乗せて早く走り、牛は車を引きて遅く歩む。
- 四、勉強は幸福の母なり。
- 五、松島、宮島、天の橋立を我が國の三景といふ。
- 六、一年には春、夏、秋、冬の四時あり。
- 七、東風吹かば香おこせよ、梅の花主なしとて春を忘るな。

第二章 代名詞

○我 汝 それ これ ここ かしこ 等ノ語ハ人物、場所等ヲ指セルモノニシテ名詞ニ代ヘテ用フル語ナリ。故ニ代名詞ト云フ。

○代名詞ノ中ニテ、我 汝 貴兄 彼 誰 等ハ人ノ

ニ用フルモノナレバ人代名詞ト云ロ、これ それ あれ ここ そこ かしこ ちち そち あち 等ハ事物、地位、方角ヲ指スモノニテ之ヲ指示代名詞ト云フ。故ニ代名詞ニハ、人代名詞、指示代名詞ノ二種アリ。

次ノ諸文章中ニアル代名詞ヲ指摘シ、且、之ヲ分類セヨ。

- 一、余は君を兄上と仰がむ、君は余を弟とも見給へ。
- 二、彼は如何なる人ぞ。
- 三、机の上に讀本をおきたりと思ふにこゝかしこ尋ねれども見ぬ。
- 四、そこにあるは誰の帽子なるか。
- 五、これとそれと能く似たり。

- 六、こゝなる門は誰が門。
- 七、かしてに見ゆるは何の光ぞ。あれは電氣燈の光なり。
- 八、これは誰の落し、金ならん。

第三章 動詞

○「鳥飛ぶ」「花咲く」「書を読む」「太郎は眠る」「馬は人を乗せて走り、牛は車を引きて歩む」ノ 飛ぶ 咲く 読む 眠る 乗せ 走り 引き 歩む ハ事物ノ動作ナイフ語ナリ。此ノ如キ語ヲ動詞ト云フ。

- 次ノ文章中ニアル動詞ヲ指摘セヨ。
- 一、藝は身を助く。
- 二、月落ち、鳥啼きて、霜天に滿つ。

- 三、病起りて後藥を用ひて病をせむるは養生の末なり。
- 四、この道を知るものは案内せよ。
- 五、書を讀み又文を學ぶ。
- 六、よく舅姑に事へよく家事を治む。
- 七、新に宮を造りて二皇子を奉じ、還りてその由を申す。

○動詞ハ其末尾種々ニ變化ス。例ヘバ、讀むトイフ動詞ハ

- (一) 書を讀ま^ず
 - (二) 書を讀み^{たり}
 - (三) 書を讀^む
 - (四) 書を讀^め
- ノ如ク、ま^みむ^めの四様に變化す。
- 又落つトイフ動詞ハ

(一) 棚より落ちたり
 (二) 馬より落つ
 (三) 落つることなし
 (四) 落つれば危し
 ノ如ク ち っ つる つれ ノ四様ニ變化ス。然レ
 ドモ前ノ讀むトイフ動詞ノ變化トハ異ナリ。斯ノ如ク
 何レノ動詞モ皆變化スルモノニシテ、其變化ヲ動詞ノ
 活用ト云フ。

○動詞ノ活用ニ種々アリ。之ニヨリテ動詞ヲ分類スルコ
 トヲ得ベシ。

○咲く 押す 分つ 習ふ 讀む 去る 等ハ左表ノ
 如ク變化ス。即、五十音圖ノ四段ニ活用ス。故ニ之ヲ四段

活用ト云フ。

- (一) 咲 か き く け
- (二) 押 さ し す せ
- (三) 分 た ち っ っ て
- (四) 習 は ひ ふ へ
- (五) 讀 ま み む め
- (六) 去 ら り る れ

カクテ其活用ノ行ニヨリ、加行四段活用、佐行四段活用
 ナドイフコトアリ。以下之ニナラヘ。

○生く 落つ 強ふ 恨む 報ゆ 懲る 等ハ左表ノ
 如クい列トウ列トノ二段ニ活用シ、之ニる、れノ添ハル
 モノナリ

(一)	生 <small>なま</small>	落 <small>おち</small>	強 <small>つよ</small>	恨 <small>うらみ</small>	報 <small>かたが</small>	懲 <small>こり</small>
(二)	さ	ち	ひ	み	い	り
(三)	く	つ	ふ	む	ゆ	る
(四)	くる	つる	ふる	むる	ゆる	る
(五)	くれ	つれ	ふれ	むれ	ゆれ	るれ

○受く 寄す 隔つ 兼ね 覺ゆ 等ハ左表ノ如ク
 列ト列トノ二段ニ活用レ之ニるれノ添ハルモナ

(一)	得 <small>え</small>	受 <small>う</small>	寄 <small>よ</small>
(二)	ね	け	せ
(三)	う	く	す
(四)	うる	くる	する
(五)	うれ	くれ	すれ

(四)	隔 <small>へ</small>	兼 <small>あ</small>	教 <small>おし</small>	譽 <small>うた</small>	覺 <small>おぼ</small>	觸 <small>ふ</small>	植 <small>う</small>
(五)	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ
(六)	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
(七)	つる	ぬる	ふる	むる	ゆる	るる	うる
(八)	つれ	ぬれ	ふれ	むれ	ゆれ	るれ	うれ

○此二活用ハ共ニ二段ノ活用ナレドモ初ナルハ
 列トノ二段ニ活キ後ナルハ列トノ二段ニ
 活ク。列ヲ中央ト見レバ初ナルハ上ノ二段ナルヲ以
 テ上二段活用ト云ヒ後ナルハ下ノ二段ナルヲ以テ下
 二段活用ト云フ。

右三種ノ活用法ニヨリテ、次ナル諸動詞ヲ區別セヨ。

行く 走る 縫ふ 斬る 泣く 降る
 渡る 消ゆ 祝ふ 學ぶ 起く 翻る
 放つ 結ぶ 進む 榮ゆ 堪ふ 絶ゆ
 導く 枯る 占む 喜ぶ 飢う 垂る
 眺む 望む 囀る 願ふ 食ふ 閉づ
 加ふ 冷ゆ 積む 崩る 耻づ

○射る 着る 見る ノ如キハ、い列ノ一段ノミアリテ、之ニる、れノ添ハルモノナリ。

- (一) 射 い いる いれ
- (二) 着 きさ さまる され
- (三) 責 に なる くれ

- (四) 干 ひ ひる ひれ
- (五) 見 み みる みれ
- (六) 居 ゐ ゐる ゐれ

○蹴る トイフ一語ハ、え列ノ「け」ノミアリテ、之ニる、れノ添ハルモノナリ。

蹴 け ける けれ

○此二種ヲ比較スルニ 射る 着る 見る 等ハ上ノ一段ノミナルヲ以テ上ノ一段活用ト云ヒ、蹴る ハ下ノ一段ノミナルヲ以テ、下ノ一段活用ト云フ。

次ノ諸動詞ノ活用ヲ示セ。

似る 持つ 中つ 鱗る 瘦す 亡ぶ
 寝ぬ 洩る 浮ぶ 耻づ 隠る 見ゆ

見る 解く 強ふ 戀ふ 煮る

○來 ト云フ一語ノミハ左表ノ如ク活用ス。之ヲ加行變格活用ト云フ。

來 こ き く くる くれ

○す(爲) たはす(御座) ノ二語ハ左表ノ如ク活用ス。之ヲ佐行變格活用ト云フ。

爲 せ し す する すれ

○すハ 敬す 服す 説明す 頂戴す 賞賛す 都

す 旅す 罪す 等ノ如ク漢語又ハ名詞等ニ添ハリ

テ一語ヲナスヲ以テ其各語ヲ一動詞ト見レバ此活用

ニ屬スルモノ甚多シ。論ず 減ず 感ず 生ず 扱

ず 崩ずノ如ク濁レルモ亦同シ。是唯發音ノ便利ノタ

メニ濁リタルモノト知ルベシ。

[注意] 佐行變格ニハ す(爲) おはす(御座) ノ二語ア

ルノミナレドモ漢語或ハ他ノ詞ニ、せ し す

する すれ ノ添ヒテ動詞トナレルハ皆コノ變格

ニ屬セリ。佐行下二段ト混同スルコトナカレ。

漢語若クハ名詞ニ佐行變格 すノ添ハリテ一動詞

トナレルモノ、三十ヲ舉ゲヨ。

○死ぬ 往ぬ ノ二語ノミハ左表ノ如ク活用ス。之ヲ奈

行變格活用ト云フ。

(一) 死 ぬ に ぬ ぬる ぬれ ぬ

○あり 居り 侍り ノ三語ハ左ノ如ク活用ス。之ヲ良行變格活用ト云フ。

(一) 有らりるれ

右ノ表ニヨレバ良行四段ノ 降る 散る 走る 等
 ト少シモ異ナル所ナキガ如シ。然ルニ別ニ良行變格ノ
 名アルハ何故ナルカ。是 散る 降る 等ハ 「雨降
 る」 「花散る」 ノ如ク、 〃ニテ言ヒ切ルモノニテ、
 「雨降り」 「花散り」 ノ如ク、 〃ニテハ言ヒ切ルモノ
 ニアラズ。之ニ反シテ 有り 侍り ノ如キハ、「臣は
 此處に侍る」 「筆ある」 ノ如ク、 〃ニテハ言ヒ切ラ
 ズ、「臣は此處に侍り」 「筆あり」 ノ如ク、 〃ニテハ
 言ヒ切ルモノニテ、其活用異ナレバナリ。尙委シクハ中
 卷ニ至リテ知ルヲ得ン。

○以上學ヘル所ニヨリ、動詞ノ活用ニ、九種アルコトヲ知

レリ。即左ノ如シ。

五格の動詞

- (一) 四段活用
- (二) 上二段活用
- (三) 下二段活用
- (四) 上一段活用
- (五) 下一段活用
- (六) 加行變格活用
- (七) 佐行變格活用
- (八) 奈行變格活用
- (九) 良行變格活用

變格の動詞

○動詞ノ變化スル部分ヲ語尾ト云ヒ、活用セザル部分ヲ語幹ト云フ。

○九種ノ活用中上一段以下ノ六種ノ活用ハ其所屬ノ動詞極メテ少ケレバ常ニ之ヲ略記スベシ。今便利ノ爲メ一括シテ左ニ之ヲ舉ゲン

一、上一段活用……

射る 鑄る
着る 似る
煮る
干る
見る
居る

二、下一段活用……蹴る

三、加行變格活用……來

四、佐行變格活用……爲、御座す

五、良行變格活用……死、往ぬ

六、良行變格活用……

有り 居り 侍り

○動詞ノ活用ハ誤リ易キモノナリ。右ニ舉ゲタル六種ノ活用ニ屬スル語ハ常ニ略記スベシ。唯混ズル恐アルハ四段、上二段、下二段ノ三種ナリ。今之ヲ識別スル法ヲ述ベシ。

(一) 喚かず 讀ます ノ如ク打消ノ意味ヲ表スニ語尾ノお列ニ終ルモノハ四段活用ノ動詞ナリ。

(二) 落ちず 起さず ノ如ク打消ヲ表スニ語尾ノい列ニ終ルモノハ上二段活用ノ動詞ナリ。

(三) 捨てず 受けず ノ如ク打消ヲ表スニ語尾ノえ列ニ終ルモノハ下二段活用ノ動詞ナリ。

右ノ規則ニヨリ、次ナル動詞ノ何種ノ活用ニ屬スル
カヲ示セ。

- 持つ 垂る、消ゆる 滿つる 見ゆる 凍ゆる
- 働むる 解くる 破る、止むる 浮ぶ 恥づる
- 腹する 缺くる 閉づる 報ゆる 調ぶる 起くる
- 割る、集むる 集まる 歸むる 焼くる 借る
- 射る 膨る、縮むる 試る 惟る 睡む
- 霧る、曇る

左ノ口語ヲ文章語ニ改メヨ。

- 一、向うに見ゆるのは山だ。
- 二、恩を受けたるときは必報いるがよ。
- 三、手足の冷ゆる人は貧血性だ。

四、能く覺ゆる生徒は教師に譽められる。

五、名を廣めるは善けれども強ひて求めるは善くない。

六、家内の者が早く起きるのは家が榮ゆる基だ。

七、稻を植ゑる女を早乙女といふ。

八、燃えるものは薪と石炭との外に澤山ある。

九、捨てる命は持たないけれども君に捧げるならを惜しくない。

十、恥ぢる事を知つて居る人は善人だ。

十一、覺えるのもひつかしいが教へるのもひつかしい。

十二、此子は母に似て居る。

十三、過つて直に改めるのは勇氣のある人だ。

○動詞活用ノ假名遣ハ誤リ易キモノナリ。教ふ 用ふ
恥づ 植う ノ如ク、口語ニテ言フ音ト實際ノ假名

ト異ナルモノハ諸記シオク外ナシ。

次ノ諸文章中ナル白圈ヲ填ムルニ如何ナル假名ヲ用フベキカ。

- 一、聞くは易し覺サト○るは難し。
- 二、民富みたらば國も自から榮ヤ○べし。
- 三、飢ハ○たる人に食を與ふ。
- 四、習ひたることを忘るゝは耻ハ○べきことなり。
- 五、知りて答コ○ること能カ○ざるは臆病なり。
- 六、昔戸を閉ト○て勉強したる學者ありき。
- 七、恩を受けば必報ヒ○よ。
- 八、智者は治チ○て亂を思ふ。
- 九、稻を植ウ○るは六月の頃なり。

- 十、己がなし得ざるトは人に強カ○べからず。
 - 十一、誠に歡喜に堪タ○ざるなり。
 - 十二、時計の針のたマ○まなく。
- 次ノ諸文章中ニアル假名遣ノ誤ヲ正セ。

- 一、恩を受けば必報ヒふべし。
- 二、爲朝數十騎を率ツいて都へ上る。
- 三、髮ゆいも一つの職業なり。
- 四、知らざることは問ヒいて明カひべし。
- 五、一度教えられたることは忘るべからず。
- 六、若きとき學ばぬ悔ハひをかみしむる奥齒ウなさまで身は老オひにけり。
- 七、祝イハ諸人諸共に。

祝ハ諸人諸共に

八、親として子を思ひぬは絶へてなし。

九、子なければ家は絶ふるなり。

十、門閥の賤しきは耻するに足らず。

十一、飢へ凍へても武士は武士。

十二、落武者芒の穂におす。

十三、蒔かぬ種ははへぬ。

十四、盲目蛇におじす。

十五、伶俐なる頭には閉じたる口あり。

○動詞ハ事物ノ動作ヲ表ス語ナリ。動作ノ起ルニハ必之ガ主トナル事物ナカルベカラズ。例ヘバ「花咲く」鳥啼く」ノ如ク、咲く、啼くト云フ動作ハ花、鳥アリテ起ルナリ。即、花、鳥ハ咲く、啼くト云フ動作ノ主ト

ナルモノナレバ、「花咲く」ト云フ文章ニテハ花ヲ其主語ト云ヒ、「鳥啼く」ト云フ文章ニテハ鳥ヲ其主語ト云フ。而シテ「咲く、啼く」ヲ其説明語ト云フ。○スペテ文章ニハ主語ト説明語トアリ「猫眠る」「犬走る」「山見ゆ」「花散る」ノ如シ。

○然ルニ「太郎讀む」「馬喰ふ」「私は書く」「學校は募る」ノ如キハ主語モ説明語モ共ニ備リ居レドモ、何ヲ讀ムカ、何ヲ喰フカ、何ヲ書クカ、何ヲ募ルカ、其事物ヲ言ハザレバ意義未ダ十分ナラズ。

太郎本を讀む 馬草を喰ふ
私は手紙を書く 學校は生徒を募る
ノ如クニシテ始メテ十分ノ意義ヲナスベシカ、ル場合

ノ、本 草 手紙 生徒 ハ、動作ヲ受クル客體ナル
ガ故ニ、客語ト云フ。

○故ニ文章ニハ左ノ二種アルコトヲ知ル。

- 一、主語ト、説明語トヨリ成ルモノ、
- 二、主語ト、客語ト、説明語トヨリ成ルモノ、

○主語及客語トナルベキモノハ、主トシテ名詞及代名詞
ニシテ説明語トナルモノハ、動詞ナリ。(其他ニモアレド
モ、後ニ至リタイハン)。

次ノ文章中ニアル主語ト客語ト説明語トヲ指示セヨ。

- 一、火燃ゆ。
- 二、小供眠る。
- 三、下女は水を汲む。
- 四、犬人を噛む。
- 五、生徒は文法を習ふ。
- 六、牛車を引く。

七、馬が走る。

八、私は本を讀む。

九、鳥餌を求む。

十、父子を愛す。

○斯ク客語ヲ要スルト要セザルトハ動作ノ性質ニヨル
ナリ。即 燃ゆ 眠る 走る ノ如キハ其動作ヲナス
ニ動作ヲ起スモノ、外他ノモノヲ要セザレドモ、讀
む 噛む 習ふ ノ如キハ、讀まる、噛まる
るもの、習はるゝもの、ナクテハ起ラザル動作ナリ。
一ハ他物ニ及バザル動作ナレバ自動性ノ動作ト
云ヒ、自動性ノ動作ヲ表ス動詞ヲ自動詞ト云フ。
一ハ他ニ及ス動作ナレバ他動性ノ動作ト云ヒ、他
動性ノ動作ヲ表ス動詞ヲ他動詞ト云フ。

○自動、他動ヲ動詞の性ト云フ。

次ニ舉ゲタル諸動詞ノ性ヲ區別セヨ。

學まなぶ 受うく 取とる 消けす 打うつ

賞あむ 授おく 言いふ 思おふ 消けゆ

來きく 奮ふむ 笑わく 泣なく 告つぐ

攻せむ 指さす 示しす 殺ころす 聞きく

冷ひやゆ 榮さかゆ 報はゆ 用もちふ 植うち

降ふる 光ある 曇くもる 飛とぶ 行いく

○同シ動詞ニテモ用法ニヨリテ、自動性トモ他動性トモナルモノアリ。左ノ數例ヲ見テ知ルベシ。

開ひらく 戸かどを開ひらく(自) 増ます 水みづを増ます(自)

吹ふく 風かぜを吹ふく(自) 引ひく 後あとへ引ひく(自)

笛ふえを吹ふく(他) 車くるまを引ひく(他)

〔注意〕 同シ漢字ヲ用ヒタル動詞モ活用異ナレバ性モ亦異ナルコト多シ。

次ナル諸動詞ノ性ヲ區別シ、兩性ヲ有スルモノハ各其活用ヲ示セ。

笑わく 狂くる人が笑わく(自)
狂くる人を笑わく(他)

換かへる 起たち 切きる 残のこる 沸わく 寄よる 掘ほる 悲かなむ

乗のる 退ひく 浮うぶ 立たつ 落おつ 過あぐ 違ちがふ 遣やる

盡つく 亡なぶ 別わかつ 似にる 見みゆ 倒たる 解とく 積たむ

出でづ 明あく 摩ある 搖ゆる 消けゆ 進すすむ 抜ひく 答こたへ

枯かわる 崩くづる 流ながる 入いる 締しむ 慰なぐさむ 忘わる 向むかふ

焼やく 沈しづむ 移うつる 散ちる 奮ふむ 並ならぶ

第四章 形容詞

形容詞

○「高き山」「深き川」「善き生徒」「富士山は高し」「日本海は深し」「彼の行は善し」ノ、高き、高し、深き、深し、善き、善しノ如キハ事物ノ有様ヲ形容シテイフ語ナリ。故ニ之ヲ形容詞ト云フ。

○形容詞モ亦動詞ノ如ク語尾ヲ變化ス。其變化ハ左ノ如ク。

○ 深 ふか	深 ふか	遠 とほ	高 たか	高 たか	深 ふか
○ 高 たか	高 たか	遠 とほ	高 たか	高 たか	深 ふか
○ 深 ふか	高 たか	遠 とほ	高 たか	高 たか	深 ふか

ノ如ク變化セザル部分ヲ語幹ト

云ヒ、變化スル部分ヲ語尾ト云フ。

○ 悲し 嬉し 悲し ノ如ク語幹ニ し ナ含メルモ
ノハ第二段目ノ活用ニ於テハしヲ添ヘズ。

悲し 嬉し 悲し
く ○ さ けれ
悲し

次ナル諸文章中ノ形容詞ヲ指摘セヨ。

- 一、 小き家の側に、太き松の木あり。
- 二、 家貧しき者は志却りて固し。
- 三、 苦しき事に耐へずば、樂しき事もあるまじ。
- 四、 煙波淼茫として、松青く、砂白し。
- 五、 山高きを以て貴しとせず、木あるを以て貴しとす。

- 六、良薬は口に苦しといふは善き薬なり。
- 七、祝ふ今日こそ樂しけれ。
- 八、人多き人の中にも人はなし。
- 九、我がものと思へば輕し笠の雪。
- 十、高きも卑しきも老いたるも若きも皆同じ心にぞ見えける。

第五章 助動詞

○「球を受けらる」「牛に車を引かしむ」「人に頼まる」「花咲きたり」ノ「らる」「しむ」「たり」等ハ、動詞ノ意味ヲ助クルタメニ用フル語ナリ。故ニ之ヲ助動詞ト云フ。

次ナル文章中ノ助動詞ヲ指摘セヨ。

- 一、梅の花は咲きたれども鶯は未だ鳴かず。
- 二、昨日は遠足會にて上野に行きたり。
- 三、花咲きたれども見る人もなし。
- 四、牛に引かれて善光寺参り。
- 五、小兒に本を讀ましむるは何よりも大切な事。
- 六、知らぬことは知らずと答ふべし。
- 七、今日は天長節なれば楽しく遊ばん。
- 八、死すべき時に死せよ。
- 九、今日はよく勉強したれども作文を清書することを忘れたり。
- 十、中納言を斬り奉りし本間三郎といふものぞ、只一人臥したりける。
- 十一、返すく戒められても聞かざりしかば遂には世に用なきも

のになり果てぬ。

十二、終日何事もなすことなくて過ぎけり。

十三、是は先年長くも六波羅攻のありし時下したまひし給旨なり。

○助動詞ニモ語尾ノ活用アリ。其活用ハ動詞ノニ類スルモノ多シ。

(一) 下二段活用ニ等レキモノ

受けらる 讀まる 言はず 受けさす 言はしむ

咲きつ ノ如キ、 する する する する する

ノ六ツハ下二段活用ト同シキ活用ヲナス。即左ノ如シ。

(一) れ る るる るれ

(二) られ らる らるる らるれ

(三) せ す する すれ

(四) させ さす さする さすれ

(五) しめ しむ しむる しむれ

(六) て っ っる っれ

(二) 良行變格活用ニ等レキモノ

○「花咲きたり」「書を読むなり」「書を読みけり」ノ「たりなりけり」ノ三ツハ良行變格ト等レキ活用ヲナス。即左ノ如シ。

(一) たら たり たる たれ

(二) なら なり なる なれ

(三) けら けり ける けれ

(三) 奈行變格活用ニ等レキモノ

○「花咲さぬ」「鳥啼さぬ」ノ「ぬ」ハ奈行變格活用ト等

シキ活用ナナス。

(一) なにぬぬるぬれぬ

(四) 形容詞ニ等シキ活用ナナスモノ

○「花咲くべし」「鳥啼くまじ」ノ べし まじ ノニツ
ハ形容詞ト等シキ活用ナナス。

(一) べくべしへきへけれ

(二) まじくまじまじきまじけれ

○此外ノ助動詞ハ三段ニ活用スルモノト、二段ニ活用ス
ルモノトアリ。

(五) 三段ニ活用スルモノ

○「花咲きき」「花咲かず」ノ き ず ノニツハ三段ニ
活用ス

(一) かししか

(二) ずぬぬ

(注意) コノニツハ其活用、他行ニワタレリ。

(六) 二段ニ活用スルモノ

○「花咲かむ」「鳥啼くらむ」ノ む らむ ノニツハ二
段ニ活用ス。其狀四段活用ノ下半ニ似タリ。

(一) むめ

(二) らむらめ

○之ニヨリテ考フレバ、受けられん 得らる 賞めら
る、事 見らるれど ナド用ヒタル、られ らる
らる、らるれハ、皆同一助動詞ナルヲ知ル。うた
しめたり 行かむ 見しむるに 言はしむれば

ノ如キモ亦然リ。以下准ジテ知ルベシ。
 今最普通ナル助動詞ノ活用ヲ左ニ表示セン。
 其餘ハ後ニ至リテ示スベシ。

助動詞活用表

二		一			
け	なら	て	しめ	させ	られ
ら	ら				
け	なり	つ	しむ	すす	らる
り	たり				
ける	なる	つる	しむる	する	らるる
けれ	なれ	つれ	しむれ	すれ	らるれ

第六章 副詞

三	な	に	ぬ	ぬ	ぬれ	ね
四	ま	ま	ま	ま	ま	ま
五	ま	ま	ま	ま	ま	ま
六	ま	ま	ま	ま	ま	ま

○「必行くべし」「靜に走れ」「最も強き動物」「いと短き竹」
 ノ必 靜に 最も いと ノ如キ語ハ、動詞或ハ形
 容詞ニ副ヒテ、其意味ヲ限定スルニ用フルモノナリ。右
 ノ例ニテハ、必 靜に ハ動詞ニ添ヒ、最も いと

ハ形詞ニ添ヒタリ。斯ノ如キ語ヲ副詞ト云フ。副詞ハ又「いと靜に言へり」「最も早く走る」ノ「いと」「最も」ノ如ク、他ノ副詞ニモ副ヒテ、其意味ヲ限定スルコトアリ。故ニ副詞トハ、動詞形容詞及ヒ他ノ副詞ニ添ヒテ、其意味ヲ限定スル語ナリ。

早く 軽く 能く 等ハ形容詞ナレドモ、「犬を軽く撃つ」「馬が早く走る」「彼は能く勉強す」ノ如ク動詞ニ添フトキハ副詞トナルコト多シ。

次ノ文章中ニアル副詞ヲ指摘セヨ。

- 一、賢き人必長命すども限らず。
- 二、尙暫く待ち給へ。
- 三、屢戒められても尙改めざる者あり。

- 四、夙に起き夜に寐ね能く勉強せば賢き人となるべし。
- 五、馬は人を乗せて早く走り、牛は車を引きて遅く歩む。
- 六、能く遊び又能く學ぶべし。
- 七、久しく見ざりしが、格別變りたることもなし。
- 八、唯泣くより外の事ぞなき。

○右ノ諸例ハ、直ナニ動詞形容詞又ハ他ノ副詞ニ添ヒタル場合ナレドモ、副詞ハ又數語ヲ隔テ、動詞形容詞ノ意味ヲ限定スルコトアリ。例ヘバ「能く書を読む」「別に變りたることもなし」ノ如シ。前後ノ意味ニヨリテ其限定セル語ヲ考フベシ。

次ノ文章中ニアル副詞ヲ指摘シ、且其限定セル語ヲ示セ。

- 一、多く古人の書を讀む。
- 二、夙に凡兒に秀でたり。
- 三、能くむつかしき問題を解く。
- 四、廣く眼を放つて宇内の形勢を考ふ。
- 五、今は果報も盡き果てたり。
- 六、暫く御心を静めおはしまして、重盛が申し狀を具に聞こしめられよ。
- 七、いつぞや先生に聞きしことを思ひ出せり。
- 八、毎年一度船を遣さんと約束せり。
- 九、今更往事を悔ゆとも詮なかるべし。
- 十、彼は必ず一度決心したる事を断行す。
- 十一、誠に尤らしく申すにつけても彌名殘を惜しま。

第七章 接續詞

○「能く學び又能く遊ぶ」「雨降り且風吹く」知りてなさゞりしか抑忘れたりしか」ノ 又「且抑」ノ如キハ、文又ハ語句ヲ接續スル語ナリ。故ニ之ヲ接續詞ト云フ。

次ノ文章中ニアル接續詞ヲ指摘セヨ。

- 一、書を讀み又文を學ぶ。
- 二、此筆は書にも宜しく亦畫にもよろし。
- 三、文を學び或は武を研く。
- 四、重盛は君に忠を致し且父に孝を竭せり。
- 五、日本及支那は東洋の帝國なり。

六、かくなり行くは天命か、はた自から招く所か。

第八章 △助詞

○「馬に騎る」「机に向ふ」「馬を走らす」「書を読む」「馬は人を乗す」「人も言ひ我も思ふ」「忠と孝と何れか重き」
 ノにををはもごかノ如キハ、名詞、動詞、形容詞等ノ間ニ加ハリテ、其關係ヲ定ムル語ナリ。例ヘバ
 人本ノ二名詞ト與ふノ一動詞トアリトセンニ、唯
 人本與ふトノミアリテハ其意通ゼズ。其ノ間ニ
 人にをヲ加ヘテ、「人に本を與ふ」トナシテ、始メテ
 人ト本ト與ふト云フ動作トノ關係ヲ明ニシ、意味モ亦
 定マルガ如シ。此種ノ語ハ其數甚多シ。之ヲ總稱シテ助

詞ト云フ。所謂てにをは是ナリ。

○助詞ハ活用セズ。今最普通ナル助詞ヲ左ニ舉ゲン。

が の に を へ ご より から まで
 は も さ へ す ら だ に ば かり の み ぞ こ そ
 ば ご ご も ご も や か

次ノ文章中ニアル助詞ヲ指摘セヨ。

- 一、 人犬を飼ふ。
- 二、 蝶花の上に戯る。
- 三、 新橋までは馬車にて行き新橋よりは汽車にて行かむ。
- 四、 わが本分だに盡さぬ人の多きぞかし。
- 五、 是ぞ吾が身の幸なる。
- 六、 犬すら尙主恩を知る人にして犬に如かさるべけむや。

七、汝は誰の子なるか。

八、君のためには家をも身をも顧みるべきにあらず。

九、かくすればかくなるのと知りながら止むに止まれぬ大和魂

(吉田松陰辭世の歌)

十、ながらといふもつゝといふも同じ意味なりや。

○種々ノ詞ノ關係ハ、助詞ニヨリテ定マルモノナレバ、注意シテ其意義ヲ明ニスベシ。

第九章 感動詞

○「あゝ悲し」「面白きかな」「あな恐しや」「あはれ今年の秋も過ぎたり。」等ノ「あゝ」「かな」「あなや」「あはれ」ノ如キハ、感動シタルトキニ發スル詞ナリ。故ニ之ヲ感

動詞ト云フ。

次ノ文章中ニアル感動詞ヲ指摘セヨ。

- 一、あゝ忠なるかな、孝なるかな。
- 二、いざ之より出立仕らじ。
- 三、あなあさましの世や。
- 四、やあ、やあ汝も敵の子分か。
- 五、まどかにめぐれよ、やよ子供。
- 六、すは一大事とかけ出したリ。
- 七、忠と孝とは片時も忘るべからざることをぞかし。
- 八、いで一うちと勇み立つ。
- 九、あな嬉し喜ばし。
- 十、嗚呼忠臣楠子の墓。

第十章 單語の種類

○以上學ビタル所ニヨリテ、吾人が毎日使用セル言語ニハ、九種ノ別アルコトヲ知レリ。

○「馬」「牛」「行く」「走る」「美し」「善し」「けり」「たり」等一語一語ヲ單語ト云ヒ、單語ノ一種類、即名詞代名詞等ヲ品詞ト云フ。故ニ國語ニハ九種ノ品詞アリト知ルベシ。即チ左ノ如シ。

- 名詞
- 代名詞
- 動詞
- 形容詞
- 九)
- 單語ノ種類品
- 助動詞

列

左ノ諸文章中ニアル單語ノ品詞ヲ區別セヨ。

- 一、人は萬物の靈なり。
- 二、朱に交れば赤くなる。
- 三、日本男兒の村田銃彈丸命中類なし。
- 四、書を讀み、又文を學ぶ。
- 五、盲目蛇に怖ぢず。
- 六、其處に居るは誰ぞ。
- 七、馬は人を乗せて早く走り、牛は車を引きて遅く歩む。
- 八、我こそは參議經盛の三男無官の大夫敦盛なれ、早々首をうた

(詞)

副詞
 接續詞
 助詞
 感動詞

れよと西に向ひて手を合はす。

九、朝は五時に起き、夜は十時に臥し、働く時は勞を嫌はず。

十、京都は山水の景色に富める處なり。

十一、松島、天の橋立、宮島を日本三景といふ。

十二、北條氏八十萬の兵を率ゐて金剛山の城を攻む。

十三、惜まれて散るを櫻のはまれかな。

十四、歩まば歩まれしを、人に勸められて車に乗りぬ。

十五、今に至りて悔ゆれども、齡既に傾きたり。

十六、父母なき人は如何に悲しからむ。

十七、平重盛は忠且孝なる人なりき。

十八、高き屋に登りて見れば、烟立つ民のかまどは、賑ひにけり。

十九、和歌のうらわに夕潮満ち來れば、岸の群鶴葦邊に鳴き渡る。

二十、敷島の大和心を人間は、朝日にはほふ山櫻花。

訂 中等國文典 上卷 終

圖書部

正中會社圖書部

明治三十一年四月十三日發行
 明治三十二年二月十七日發行
 明治三十四年五月十四日發行
 明治三十四年五月十四日發行
 明治三十四年五月十四日發行
 明治三十四年五月十四日發行
 明治三十四年五月十四日發行

著述者

三土忠造



版權所有

發行者
 代表者
 印刷者
 印刷所

發兌元

(明治廿九年六月設立)

中等國文典與附
上卷 正價金貳拾錢
中卷 正價金貳拾錢
下卷 正價金貳拾錢

東京市神田區裏神保町九番地
 合資會社 富山房
 合資會社 富山房社長
 坂本嘉治馬
 仁科衛
 同所
 厚信舍
 (電話浪花一四六番)
 富山房
 電話本局(電話號碼)ヤマコ
 長距離(電話號碼)ヤマコ
 加入(電話號碼)ヤマコ

国立国会図書館



明治三十四年二月十六日
文部省檢定済

文學士 芳賀矢一 關
三士 忠造 著

訂正 中等國文典 卷上

東京 會社 富山房發兌

訂正につきて

本書出版以來幸に世の好評を博し、中小學百有餘校の教科書に採用せられて、版を重ねること既に幾たびにもなりぬ。其間大方の君子より數多有益の注意を與へられ、予が實驗上心付きし要點も少からざりしを、出版の急に迫まれ、每版改正に著手するに暇なく、心ならずも舊版を踏襲したりき。茲に本年の夏期休業に際し、閑地に靜養せる間、始めて多少の訂正を加ふるを得たるは余が最も欣ぶ所なり。

訂正につきて
合資

80W04746

八、親として子を思ひぬは絶へてなし。

九、子なければ家は絶ふるなり。

十、門閥の賤しきは耻するに足らず。

十一、飢へ凍へても武士は武士。

十二、落武者芒の穂におす。

十三、蒔かぬ種ははへぬ。

十四、盲目蛇におじす。

十五、伶俐なる頭には閉じたる口あり。

○動詞ハ事物ノ動作ヲ表ス語ナリ。動作ノ起ルニハ必之ガ主トナル事物ヲカルベカラズ。例ヘバ「花咲く」、「鳥啼く」ノ如ク、咲く、啼くト云フ動作ハ花、鳥アリテ起ルナリ。即ち花、鳥ハ咲く、啼くト云フ動作ノ主ト

ナルモノナレバ、「花咲く」ト云フ文章ニテハ花ヲ其主語ト云ヒ、「鳥啼く」ト云フ文章ニテハ鳥ヲ其主語ト云フ。而シテ咲く、啼くヲ其説明語ト云フ。
○スベテ文章ニハ主語ト説明語トアリ。「猫眠る」「犬走る」「山見ゆ」「花散る」ノ如シ。

○然ルニ「太郎讀む」「馬喰ふ」「私は書く」「學校は募る」ノ如キハ主語モ説明語モ共ニ備リ居レドモ、何ヲ讀ムカ、何ヲ喰フカ、何ヲ書クカ、何ヲ募ルカ、其事物ヲ言ハザレバ意義未ダ十分ナラズ。

太郎本を讀む　馬草を喰ふ
私は手紙を書く　學校は生徒を募る
ノ如クニシテ始メテ十分ノ意義ヲナスベシカ、ル場合